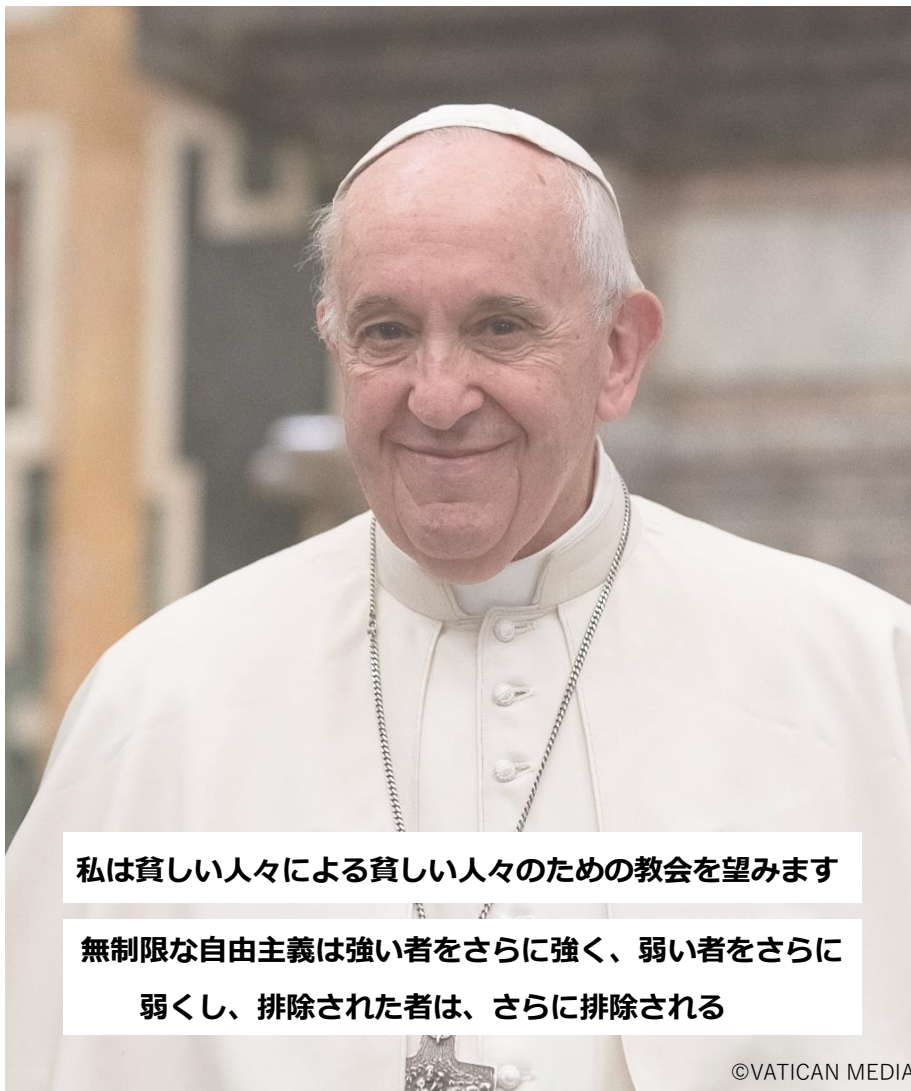




年間テーマ ～戦後 80 年、平和の巡礼者として、祈り、行動しよう～



私は貧しい人々による貧しい人々のための教会を望みます

無制限な自由主義は強い者をさらに強く、弱い者をさらに弱くし、排除された者は、さらに排除される

©VATICAN MEDIA

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。



平和の巡礼者として



阿倍野教会信徒

嶋田 至

20 年ほど前に、『サン・ジャックへの道』というフランス映画を観ました。「サン・ジャックへの道」とは、フランスからピレネー山脈を越えてスペイン西端のサンティアゴ・デ・コンポステーラに到る、1,000 キロを超える巡礼路のことです。

この映画の主演は、さまざまな理由で巡礼路を歩くことになった9人のグループです。

遺産相続の条件ゆえに参加した仲の悪い兄弟姉妹、
ちょっと訳ありの女性、お気楽な気持ちで参加した女子高校生、「メッカに行く」と勘違いして参加したアラブ系の若者…。



はじめは皆、自分のことにしか関心がなく、日常の習慣を引きずったまま歩き始めます。

自分勝手な行動をとったり、対立がおこったりしますが、ともに歩き続けるなかでだんだんと相互理解が深まり、支えあう関係性が培われていきます。

『シナピスニュース』の年間テーマ「戦後 80 年、平和の巡礼者として、祈り、行動しよう」から、こんな映画を思い出しました。

巡礼というと、祈りながら黙々と歩き続けるイメージがありますが、実際はかなり過酷な旅のようです。さまざまな背景をもつ人たちでも、同じ目的地をめざしてともに困難を乗り越えていくことで、人として大切なことを見出したり、協働の関係を深めていくことができるのかもしれない。

「社会平和は、骨の折れる手仕事です。…異なるものをすべて組み入れることは、はるかに困難で時間がかかることではありますが、それこそが真の堅固な平和を保障するのです」

(『回勅 兄弟の皆さん』より)

「平和への道」は、「サン・ジャックへの道」よりも、はるかに困難な道だと思います。

だからこそ、多様な考え方や価値観をもった人たちが集い、ともに歩き始めることが大切なのでしょう。多様であることは、自分勝手と思われる行動を促したり、対立を生じさせたりしがちです。しかし、ともに歩き続け、対話を重ねることでお互いの理解が深まり、各々の「違い」が大きな力に昇華することも期待できます。とても骨の折れる道程かもしれませんが、ともに平和への巡礼を続けていきたいと思います。

アルコール依存症雑感



精神保健福祉士 玉造教会信徒 高橋 郁夫

大阪市西成区の「釜ヶ崎」で、アルコールや薬物他、いろいろな依存症に苦しむ人びとを中心とした障がい者全般の日常生活支援をしています。

今回、「シナピスニュース」の貴重なスペースをお借りして、支援者の立場から「アルコール依存症」について最低限知っていただきたいことを少し書かせていただきたいと思います。

釜ヶ崎で出会うおじさんの中には、アルコール依存症のために、家族を失い、仕事を失い、住まいを失い、釜ヶ崎にやってきて、生活保護を受けながら单身生活をされている方々がたくさんいらっしゃいます。

毎日の生活支援をしながら、少しずつ規則正しい生活を、そしてついには彼らが失ったものをひとつひとつ取り戻していくお手伝いをさせていただく仕事です。

さて、わたしがそういう仕事をしていることを話すと、圧倒的に多くの方から受ける質問があります。それは『『お酒が好きな人』と『アルコール依存症者』の境目はどこですか?』という質問です。今日の最新の表現でいえば「依存症はコントロール障がいである」という表現が一番理解していただけるかと思います。世界的にも「使用障がい」と言っています。うまく使えないということです。「飲んだらいけないときに飲んでしまう」ということでしょうか。いったん、そういう脳になると、もはや逆戻りはできません。完治がない病気です。

かつては「アルコール中毒」あるいは「アル中」と広く呼ばれていた今の「アルコール依存症」。皆さんはどんな印象をお持ちでしょうか？ 意思が弱い人になるのでしょうか？ 昔から言われる「酒乱」、あるいは「酒癖の悪い人」でしょうか？

今、依存症者支援者の世界で強調されていることは、「生きづらさを抱えた人たちが生きていくために必要な手段をとってきた結果、依存症になってしまった」という考え方です。

「お酒」がなければ生きてこれなかった、アルコールの力を借りなければ最早その方は生きていないかもしれません。ですから、アルコールから離れた人生を取り戻すには、その「生きづらさ」を取り除く、あるいは緩和することを考えなければなりません。そのことで元のアルコールに依存しない生活を取り戻していけるのです。

皆さんの周りで、アルコールの飲み方で悩んでいる方はいらっしゃいませんか？ きっと克服できる病気です。専門の病院で受診されることをお勧めします。その方たちを応援する人もたくさんいます。

シナピス「フクシマ視察ツアー」報告

今年で12回目となる『いのちの光3・15フクシマ～フクシマが背負ってきたもの伝えつづけるもの～』への参加と現地を視察するツアーに、2名の参加者と松浦謙センター長が行ってきました。

『いのちの光3・15 フクシマ』は呼びかけます。(原発事故について、福島だけに限定せず幅広い社会問題として捉えるため、「フクシマ」と表記します)

3月15日は、東京電力福島第一原子力発電所が3度目の爆発を起こし、フクシマへと運命を変えた日です。第一原発から約25kmの距離にある、カトリック原町教会でのミサによる祈りと現地の人々の声を聴き、「いのち」のあり方について共に考え、メッセージを発信していきます。

政府が2月に改定した「エネルギー基本計画」では、原発の「依存度を低減する」との従来の表現が削除され、「最大限活用する」と明記されました。推進派は「画期的だ」と喜んでいるようです。

原発事故の教訓は？ いのちと暮らしを守る道と原発は両立するのでしょうか？

今回のツアーが、もう一度、皆さんと考え始めるきっかけになればと願っています。

[3/14(晴)]

12:30～ カリタス南相馬(地域住民への寄り添い、復興支援の他、ボランティアの受入れ、現地案内、地域の情報発信など行う)で説明を受けた後、スタッフの宇根さんの案内で被災地域の視察

➡ 南相馬市の原町区、小高区、また浪江町、双葉町、大熊町をまわる。中間貯蔵施設や太陽光発電の現場など ➡ 東京電力廃炉資料館 ➡ 東日本大震災・原子力災害伝承館

夜 根本さん(カリタス南相馬所長、災害派遣ナースとして現地に入る)のお話とディスカッション

[3/15(雨)]

9:00 希望の牧場(被爆した牛200頭以上の飼育を続けている)

➡ 大平山霊園 ➡ 震災遺構請戸小学校

12:20 おれたちの伝承館・もやい展

13:40～16:00 いのちの光3・15 フクシマ

「アートを通じて伝える原発事故」中筋純さん(写真家・おれたちの伝承館館長)

ミサ 幸田和生東京教区名誉補佐司教(原町・いわき教会担当)



双葉郡大熊町

[3/16(雨)]

9:30 相馬市伝承鎮魂記念館・慰霊碑➡中浜小学校(宮城県亘理郡山元町)

15:30～17:00 いのちの光3・15 フクシマ

「内部被爆の治療をライフワークとする医師が語る被爆の健康被害の真実」西尾正道さん(北海道がんセンター名誉院長)

5月17日(土)、午後1時から、梅田のサクラ・ファミリアで報告会をいたします
そちらにもぜひ、ご参加いただきたいと思います

参加者の感想①

同志社大学 学生 中井 ルネ

毎年3月11日近くなるとニュースで東日本大震災(以下3・11とします)の特集が流れ、「もう〇年経つんだなあ」と振り返る自分がいました。

今回の視察に参加したきっかけは、3・11は過ぎ去った歴史のようで、振り返る機会が少なすぎると気づいたからです。私は3・11について無知に近い状態でした。

お恥ずかしい話ですが、視察に行く決めてから初めて、「原発」と「東電」が関係していることを知りました。無知であることに焦りを感じた私は、この機会を絶対に逃してはいけないと感じ、視察に行く決断をしました。



仙台空港の津波到達高

3・11は「巨大地震」、「大津波」、「原発事故」の複合災害(トリプル災害)と呼ばれています。2011.3.11の夕方、日が暮れて捜索活動を中断し、翌日の早朝に再開する予定でした。しかし、原発事故の危険から捜索を中止して町民は避難しなければならない状態になりました。

もし、「原発」が無かったら予定通り捜索活動を再開させ、救うことができた命はたくさんあったことでしょう。

複合災害がゆえの惨劇と感じた私は、南海トラフ巨大地震が発生した時、同じことが起こるのではと心配します。関西にも原子力発電所があります。活断層の活動が活発で、火山の噴火も予想されることを知り、恐怖心に駆られると同時に3・11は人ごとではないと実感します。もうこれ以上、原発事故で苦しむ人を増やしたくない、3・11の教訓を無駄にしたくないという気持ちで胸がいっぱいです。

3日間という短い期間でしたが、私にとって初めての福島訪問でした。食べ物は本当に新鮮で頂く度にほっぺが落ちてしまいそうでした。地元のスーパーでは、地域の方の温かさに触れ、笑顔を拝見し、ほっこりした反面、いまだに14年前と変わらない街並みも一部見られ、まだまだ国全体の最重要課題として考えなければならない問題がたくさん残っていると感じました。

こんなにも歓迎していただいたからには、なんとかして恩返ししたい。

今の私ができることは、今回、五感で感じたあらゆる経験、3・11から得た教訓を一人でも多くの人に伝え、特に原発に関する意識を関西でも高めることです。まずは身の回りの方に伝えることから始めたいと考え、出身高校でのプレゼンテーションを予定しています。



請戸小学校の印刷室

最後になりましたが、今回お世話になったカリタス南相馬の方々、福島県の魅力に気づく機会をくださり、本当にありがとうございました。福島県、大好きです。

参加者の感想②

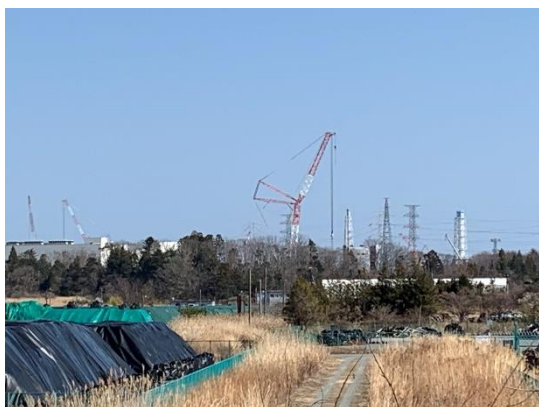
垂水教会信徒

野村 季里

今回のツアーでは「いのちの光 3・15 フクシマ」への参加を中心に現地の震災遺構、伝承館、慰霊碑を訪れました。「いのちの光 3・15 フクシマ」にはかねてより参加したいと思っていましたので、今回、喜んで参加させていただくことにしました。

私にとって今回は4度目の現地訪問となりますが、見学者の多い伝承館の周りの風景は来るたびに美しくなっています。公園やグランドゴルフ場が整備され、昨年 11 月には無かった建物もありました。それとは対照的に、人があまり来ないところは、倒壊した神社や店舗、家屋が 14 年前のまま残っています。

伝承館はとても立派な建物で映像も展示物も豊富ですが、それだけを見ていては現在進行形の帰還困難区域のことまでは伝わらないのではないかと、単なる昔話と化してしまうのではないかと、毎回モヤモヤとした気持ちになります。



福島第一原発の遠景とフレコンバッグ

翌日は震災遺構請戸小学校を見学後、南相馬市の小高区へ向かいました。脱原発都市宣言をしている南相馬市は太陽光と風力で 90%以上の電力を賄っているそうです。

山を切り開き設置された広大なメガソーラーパネルは良くも悪くも圧巻です。そしてその寿命がくる 30 年後には膨大なゴミとなることを考えると、エネルギー問題は一筋縄ではいかないと考えさせられます。

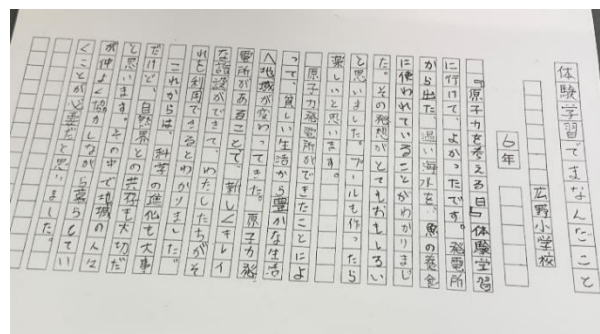
将来に大きな課題を残すうしろめたさをいつも感じてしまいます。

原町教会へ戻る前、「おれたちの伝承館」にも立ち寄りしました。

手作りの小さな伝承館ですが、地域の方々の思い、作家の方々の強いメッセージを感じる伝承館でした。講師の中筋さんは、東日本大震災が起こった時は東京におられたそうですが、福島第一原発の爆発をテレビで見た時、チェルノービリでの豊富な取材経験から、これはとんでもないことが起こったと直感的に感じられたそうです。

「おれたちの伝承館」は常設展示のほかいろいろな企画展をされるそうなので何度でも訪れたいと思いました。

翌日は仙台での講演会に参加。講師は放射線治療が専門の西尾医師でしたが、帰りの飛行機の時間が迫り最後まで聞くことができず残念でした。



原子力災害伝承館に展示

今回、大学生の中井さんと参加でき、とても学ぶことの多い充実した時間となりました。特に若い方への伝え方について考えるきっかけになりました。今後のスタディーツアーを企画する際は若い方も参加できるような工夫をしてみたいと考えています。

「旅路の里」トークサロン 2025 のお知らせ

5 月～7 月 第 3 木曜日 18:30～20:30

大阪西成の釜ヶ崎・・・労働者の街、いち早く不況や失業の波の影響を受ける街・・・多くの方にとって、気になりながらもなかなか足を向けられない街かもしれません。

「旅路の里」は、1982 年に当時六甲教会の主任司祭だった薄田昇神父によって開設され、「イエズス会社会司牧センター」として、釜ヶ崎で働く人や野宿を余儀なくされた労働者の支援をしている「釜ヶ崎キリスト教協友会」の仲間の一つです。

その「旅路の里」で「旅路の里トークサロン」をします。

「釜ヶ崎とわたし」水野阿修羅さん編（全 3 回）

1) 70 年代の釜ヶ崎

日時：5 月 15 日（木）18:30～20:30

60 年代末から 70 年代といえば、万博建設や道路などの都市基盤や団地・居住地の建設業が成長する一方、造船・製鉄・製造業など「工業地帯」を支える工場労働も日雇い労働者によってささえられていました。この時代に釜ヶ崎で働き始めた阿修羅さんの経験や、釜ヶ崎から鶴見橋商店街を越えた津守にあった「雑草舎」に集った多様な人々など、現在にも続く釜ヶ崎と地域の人々のつながりについて学びます。

2) 「アジアフレンド」について～80 年代のもう一つの釜ヶ崎

日時：6 月 19 日（木）18:30～20:30

80 年代後半、円高と経済成長のさなか、日本には多くのアジアからの女性たちがやってきました。“エンターテイナー”“労働者”とその時代を象徴する来日の陰で、暴力的・非人間的な環境に直面することもありました。そのような女性たちとかかわる「アジアフレンド」の活動について、その時代を振り返り、現在の多文化社会とのつながりを考えます。

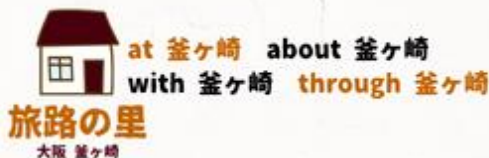
3) 寄せ場で考えるジェンダー～メンズリブとは何か

日時：7 月 17 日（木）18:30～20:30

70 年代からの女性解放運動・フェミニズム運動は女性みずからの変化だけではなく、（いまとなっては当然ですが）男性の変革も求めるものでした。

大阪で生まれたメンズリブの担い手のひとりであった阿修羅さんは現在に至るまで、男性自身が自分を振り返り、変わっていくための場を作ってくれました。

様々な経験をもつ一人一人の男性が求めたメンズリブについて伺います。



大阪市西成区萩之茶屋 2-8-9
mail: tabijinosato1@gmail.com
☎ 06-6641-7183(福田紀子)

ガザの人たちの受難は終わっていません！

シナピス運営委員 西口信幸

停戦合意の内容

第1段階

- 42日間の停戦 ■人質33人解放
- パレスチナ人 ■人口密集地から数百人を釈放 ■イスラエル軍撤退

第2段階

- 残り的人質解放 ■イスラエル軍は完全撤退

第3段階

- ガザ地区の復興計画 ■人質の遺体引き渡し

第2段階に入るはずの3月、恒久停戦や撤退に応じる気がないイスラエルは、ガザ全体を廃墟にした上で戦国時代の城攻めのように、完全に封鎖し、ガザ全体を飢餓収容所にしました。

3月18日、ついに空爆と再侵攻を開始、20回の強制避難命令を出して狭い海岸部に200万人の人を追い込んでいます。この1ヶ月、私たちは逃げ惑う養魚場の中の魚のように殺されていく人々を見続けています。北部に加えて、南部全体をKill Zone (指定殺害区域)とする「**モラグ回廊**」を建設し、すでに7割の土地が占領されました。

ガザ市民は狭い沿岸部「アル・マワシ」に追い込まれて、人口密度4万人/km²という超過密の強制収容所に閉じ込められようとしています。トランプ関税の追い風を受けて、自発的な移住を迫るトランプのリビエラ計画が現実のものとなってきました。



<強制移動指示>ガザ市、アル・マワシへの集中 3月31日 南部ラファから退去命令 2/3が立入禁止区域に！

主食の小麦粉、燃料が枯渇、4月1日には製パン店がすべて閉鎖に追い込まれました。国連機関が保有していた備蓄食料も底をつきついに195万人のうち多くが飢餓状態に入り、ほとんどの妊婦と赤ちゃんは栄養不足で、餓死の恐れにあります。6万人以上の子供が急性栄養失調で緊急治療が必要です。この瓦礫の中で、逃げ惑うお母さんから毎日100人近い赤ちゃんが産まれていることを想像して見てください。ガザは飢えているのではありません。イスラエルがガザを絶滅させるために組織的に飢えさせているのです。

3月18日から200回の爆撃がありました。避難先のハーンユニスやアル・マワシも空爆され、最後に残ったアル・アハリ病院も爆撃され、無差別（意図的な住民）殺戮が繰り返されて毎日50人以上の人が殺され続けています。33回の空爆で殺されたのは女性と子どものみでした。

5万1千人以上の死者数、2万人の孤児、10万人をこえる障害者の報告など、各種機関から様々な人道被害が報じられていますが、私たちはこの数字に麻痺してきていないでしょうか。この2年間、毎日伝えられているのは、一つひとつの生命、人生の、物語です。その一つひとつの物語に接することに、正直疲れてきました。しかしながらガザではその日常を、今も、そして希望を捨てないように懸命に生きておられます。目を背け、忘れてはいけないことを肝に命じたいと思います。

3月18日にイスラエルが戦争再開したのは、ネタニエフ政権の持続のためギリギリの日程でした。3月末までに予算案を通さなければ内閣は総辞職でした。停戦で離脱した極右のベングウィルとスモトリッチの要求は奪い続けることです。パレスチナの土地がイスラエルの領土になるまで住民の殺戮、侵略は続きます。加えてトランプ大統領の出現によって、人権侵害となる住民の国外追放も公然と語られていることを忘れてはなりません。（同じことが西岸でも始まっています）

この事実を把握しつつ、沈黙し、伝えない国際社会とメディアはジェノサイドにおいて同罪です。

◆停戦合意のゆくえ ―― 4月14日以降の話

期限付きの停戦が妥結されようとしていた矢先にハマスが到底飲めないであろう、イスラエルの追加提案が出ます。アメリカによる「戦争終結」のための真剣な協議の保障を条件に、「ハマスの非武装化」を求めるものでした。当初から第2段階に入らないこと、停戦と引き換えに西岸の侵略が了承され、ガザの完全封鎖と空爆の再開も事前承認していたアメリカの戦争終結は「無条件降伏」であり、武装解除は白旗を上げることに他なりません。ガザ住民を他国に移住させるか、狭い強制収容所に閉じ込め、ガザの土地をアメリカの所有にすることです。イスラエルの占領支配を終えて民族自決権を行使できるパレスチナの国家承認に至るものでは全くありません。民族浄化の中を77年間、耐え抜いてきたガザ市民が到底認めることができないことをじゅうぶん知った上での、ハマスへの、そしてガザ市民への最後通牒なのです。飲めない盃を差し出され、ハマスは最後の竹槍特攻隊を結成する準備をしているとも伝えられています。悲しい結末が待っているのでしょうか。

「瓦礫の地獄」とトランプが言った土地を、77年間ののちをかけて守り抜き、1月28日の停戦時に勝利とともに「大帰還」したガザの人々の魂は今、消え去ろうとしています。

◆民主主義の危機

イスラエルは米トランプ政権のサポートを受け、世界中の人々が見る中で、開き直りとも言える虐殺、破壊を続けています。人権、自由を謳ってきた欧州諸国も懸念を表明するだけで動こうとしません。ジャーナリストの殺害、国連機関の機能停止も重なり、報道もされない状況で、トランプへの忖度とも思えるような動きの停滞が見られます。「国家の利益が市民の人権に優先する」どこかで聞いたような（改正入管法の時の）議論ですが、今まで遠慮がちに語られてきた「国益あっての人権」がトランプの出現によって、憚れることなく堂々と当たり前のことになっていきそうな世界情勢です。

◆解決の糸口はないのでしょうか。

一つは、「パレスチナの国家承認」です。民族自決権を保障することでパレスチナの占領、入植、侵略を違法化することです。イスラエル建国後すぐに決議された国連総会決議194の実現に他なりません。すでに146カ国が国家承認しており、非承認は欧米と日本、韓国、オーストラリアのみです。フランスは重い腰を上げて6月の承認に向けて動き出しました。結局アメリカの拒否権が全てを決めますが、民主主義の崩壊の危機にある中、西洋社会の本気度が試されています。

もう一つは、遅すぎとも言えるでしょうが、改めて「**非暴力・不服従**」ではないかと思います。ハマスは「イスラエルがパレスチナ国土から撤退すれば自らを解体する」とも言っていますが、遅きに失することがないことを祈ります。オスロ合意の再来となるかも知れませんが、「武器は武器を正当化する」のです。石のインティファダは戦車を正当化し、ロケット弾が2000ポンド爆弾を呼んだ歴史的事実に戻らなければならないと思います。（同様に、核抑止力などあり得ないと思います。）



教皇フランシスコは、亡くなる直前までガザの人たちを気遣い、声を出し続けておられました。『ガザから非常に深刻で痛ましいニュースが届き続けています。非武装の民間人が爆撃や銃撃の被害に遭っています。これはテロです。**民間人の犠牲者は『巻き添え被害』ではありません。**

彼らは、名字や姓を持つ男女であり、命を落としたのです。彼らは孤児となり、未来を奪われた子どもたちです。彼らは飢え、渇き、寒さに苦しみ、あるいは爆発物の威力によって身体を切断された人々です。私たちが彼ら一人一人の目を見て、名前を呼び、彼らについて少しでも知ることができれば、戦争の本質がわかるでしょう。この地球上のすべての人々の尊厳を冒瀆する、計り知れない悲劇、「**無益な虐殺**」に他なりません。』

教皇フランシスコは最後まで弱い立場の人に寄り添い、力ある人の制止を乗り越えて、声を発してこられました。大きな恵みを頂いた私たちにとって最も大切なことは、市民一人ひとりが声を上げること、ではないでしょうか。公然と行われているジェノサイド、民族粛清を見て見ないふりをしないことです。いくつかの動きを紹介します。良かったらのぞいて見てください。

◆「ガザの恒久的停戦と、パレスチナの和平を求める」共同声明への賛同署名 <<緊急>>

日本のパレスチナ支援団体が、パレスチナの人々の生命と人権が守られ、ガザの恒久的停戦とパレスチナの平和の実現に向けて、日本政府が国際社会に対して外交努力するよう強く求めて、賛同を募り、政府関係者へ提出します。<<5月15日（ナクバの日）まで>>

シナピスは団体として賛同しましたが、一人でも多くの声を政府に届けるため、賛同される人は個人署名して下さいをお願いします。

- ・声明の賛同にはこちらから署名いただけます。

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeLCjYNYDPBDlpSpMz9mZmPeQ1qd5NIaLR6MfHGRBQDosZg/viewform>

また、先の停戦後にメッセージを頂いたパレスチナ農業開発センター（UAWC）代表のフアドさんからも賛同を呼びかけるメッセージが届いています。

- ・メッセージ全文：<https://altertrade.jp/wp/wp-content/uploads/2025/04/444171025271d52ac913498b67335923.pdf>



◆日本から、私たちのパレスチナ連帯行動ps 🍉🌱

ひとりでもできる、さまざまな連帯の活動が紹介されています。

<https://docs.google.com/document/d/1IUVPD02DGo5GPPM6ZU2WB0FYES4eGAaXZio07hq07hc/edit#heading=h.fgkuwzptng79>

◆BDS（ボイコット、投資の引き上げ、制裁）

日本におけるBDSガイドライン | BDS Japan Bulletin

<https://note.com/bdsjapan/n/n9fef3f7e00a4>

◆「日本政府はイスラエル関連企業への投資撤退を」 わたしたちの年金がイスラエルに投資？

日本政府はこれまでイスラエルによるパレスチナへの入植に関して国際法違反だとする立場をとり続けてきたにもかかわらず、現在のガザの虐殺に対して何のアクションも取っていません。

また年金がイスラエルの国際法違反に加担する企業に投資されていることに対して厚労省は「投資先の判断は運用受託企業が適切に判断している」「イスラエルへの投資は現時点でESG（環境・社会・ガバナンス）に反する投資ではない」としています。しかしイスラエルへの投資は国際法違反を放置するだけでなく、加担することになります。経済的利益が期待できれば、資金が虐殺に使われようとも構わないという政府の姿勢が残念でなりません。

【署名】日本の年金による虐殺と民族浄化への投資をやめさせたい！

<https://chng.it/kbqMsW64ZK>



『「正義と平和」の 50 年』とコロナパンデミック



日本カトリック正義と平和協議会事務局

昼間範子

このほど、日本カトリック正義と平和協議会は、設立 50 年記念誌『「正義と平和」の 50 年』を、2025 年 2 月付で発行いたしました。

正義と平和協議会は、第二バチカン公会議の結果を受け、1970 年に正義と平和司教委員会として発足、その 4 年後、信徒の故・武者小路 公秀さんを会長に迎え、「日本カトリック正義と平和協議会」として正式発足しました。

『「正義と平和」の 50 年』の前誌に当たる『「正義と平和」の 25 年』は、1970 年から換算して 25 年目の 95 年に発行されています。

それで企画の当初は、それを継承して 2020 年に発行しようと計画し、2019 年 8 月 16 日に第 1 回編集会議を開催しました。

しかしご存知のように、この年の末から新型コロナウイルスパンデミックが発生し、編集会議の開催も資料収集も、進めることがとても困難になりました。

その後、オンライン会議システムなど、コロナを背景とするさまざまな技術的革新が行われ、その助けを借りながら少しずつ作業を進めたものの、作業完成の道のりは遠く、「これでは 60 年記念誌になっちゃうんじゃないの？」と冗談混じりに言われたり、原稿を入稿したのに、いつ発行になるのかと執筆者の方からお叱りをいただいたりしたこともあります。

そして結局、『「日本カトリック正義と平和協議会」発足（1974 年）から 50 年』と、つじつまを合わせて、「2025 年 2 月の発行にこぎつけた」というのが、楽屋裏の本当の話です。

本誌の目玉は、「正平協だけではなく公会議以降の日本司教団、社会司教委員会など、日本の教会が発行した声明をできる限り集めてリスト化したものだ」と私は思っています。

ここから漏れた声明文はきっとまだまだあるはずですが、とても手が及びませんでした。教区や教区の正平協も声明文を出していたに違いありません。

それでも出来上がったリストを見ると、日本の教会は、社会に対して、とりわけ「いのちと平和」の問題について、本当に積極的にモノを申し続けてきたものだ、と思わず感動してしまいます。

コロナパンデミックの煽りがまだ続いているのか、今の教会はなんだか内向きになってしまったなと感じています。教会はイエスの体。そう公言するのなら、イエス様が今生きていたらきっとされただろうことを、教会はイエス様に代わって迷わず行い、為政者のことも恐れずに、モノを言っていかなくてはなりません。

**シナピスでは
皆さまと語り合う場を大切にしています。
シナピス主催のイベントにぜひご参加ください**



★シナピス「フクシマ視察」報告会

今年で 12 回目となる企画『いのちの光3・15フクシマ〜フクシマが背負ってきたもの伝えつづけるもの〜』への参加と
現地の視察にシナピスから派遣されたメンバーが報告を行います

5月17日(土) 13時~15時 申込不要

■場所：サクラファミリア

問合せ：Tel06-6942-1784 ✉sinapis@ostk.catholic.jp

サクラファミリアへの地図はこちらから →



★ゆるゆる会

5月は「南海トラフ地震について」ゆるく語り合います

この会は、世代や立場を超えて、日常のこと、
社会のこと、自分の気持ちなどをゆったりと語り合う
“ざっくばらんな学びの場”です。

5月18日(日) 14時~16時 要申込

■場所：教区本部事務局1階



← 申し込みはこちらから

教区本部事務局への地図はこちらから →



★シナピスホーム（カフェ）

難民移住者と語り合おう！

難民移住者がもてなすカフェを開催しています

5月のカフェの予定

10日、17日、24日、31日

★5月はランチはお休み

★土曜日の13時頃~16時頃

問合せ：Tel080-8940-8847



シナピスホーム Google maps

地図はこちらから ↑

事務局こぼれ話

ビスカルド篤子

4月0日 マリアランさん、シナピス活動センターで本格始動！

シナピス運営委員のマリアランさんが、毎週木曜日、おもにベトナム人のよろず相談を受けてくれることになりました。彼女自身の SNS にその案内を配信したところ、とたんに何件もの相談が毎日のように全国から寄せられるようになりました。

活動センターでは頻繁にスタッフ会議を開いて、それぞれ関わる人のお話を共有します。あるとき、「埼玉の知りあいの若者が亡くなりました」とマリアランさんから報告がありました。その人は技能実習生で、夜勤明けの帰宅途中、バイクで事故に遭ったそうです。

マリアランさんはベトナムの遺族や所属教会への葬儀の手配などに忙しい様子でした。「それは労災事故ですね」と私が言うと、マリアランさんは、通勤が労災保険の範囲に入ることを知らなかったとって、急いで関東の知り合いの弁護士につながりました。

1つの相談にチームで関わると、単独では気づかなかった点が見えたり、手を差し伸べる人が増えたりして、より手厚い助け合いネットワークが広がりますね。



4月11日 祝！家庭を持つ父親に在留特別許可

アッバスさんは難民として日本に保護を求めた人です。8年前に降り立った関西空港で難民申請をして以来「迫害の恐れ」の主張を貫いています。しかし彼はそのまま長期にわたり入管に収容され、裁判でも闘いましたが敗訴し、出口の見えないトンネルの中に留め置かれたような状況に陥りました。

それでも時は流れます。8年の間でアッバスさんは良い伴侶に出会い、家族や友人に祝福されて結婚しました。2024年には赤ちゃんが生まれました。アッバスさんは入管に何度も在留許可をお願いしましたが、入管の反応は鈍いものでした。

夫が社会から排除されると、妻も子も同じように社会的に排除されます。「登録上はいない」とされるのに「実態はいる」ので、市営住宅を申し込みできなかったり、保育所の申請ができなかったり、いちいち壁にぶち当たるのです。若く勤労意欲があるのに働けないアッバスさんは家庭人として責任が果たせず鬱々し、生活に苦しむ一家は妻の老親に支えてもらうしかありませんでした。

この日、入管に呼ばれたアッバスさんが出頭したところ、「仮放免を取り消し、あなたに在留許可を与えます」と宣告され、在留カードが手渡されました。8年半の苦しみから解放された瞬間でした。その翌日からアッバスさんは精力的に求職活動に打ち込んでいます。

アッバスさんのように、帰国できない事情のある人で、すでに日本で家庭を持ち地域に定着して生きる人たちは、とてもたくさんいます。当事者はもちろん、妻や子どもたちまでもが社会から疎外されないように、私たちは日本政府に一日も早い人道的解決をお願いしています。



先月、この欄でご紹介した井上佐治朗さんより電話があり、「4月16日 寄付振り込みました。ニュース止めて下さい」と言われました。その2日後に帰天されたとの知らせを受けました。佐治朗おじさん、長い間ありがとうございました。どうぞ安らかに！

活動へのご支援ご協力を
よろしくお願いいたします。



お米、カップ麺、日持ちのする食料品、
家電製品のご寄付をお願いします

お電話をお待ちしています！！

☎06-6941-4999



スペイン語・中国語・英語の通訳・
翻訳作業ができる方を探しています。
報酬応相談



◀◀◀ HP はこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

「ニュースレター配布停止」、
「点訳版の郵送」をご希望の方は
シナピスにご連絡ください。
☎06-6942-1784

あとがき

かつて「平和の手」と「東ティモールデスク」で働き、
今年の1月からシナピスに戻ってきた大森です。20年振りの復帰です。昨年の夏頃からニュースへ投稿を始めたので、「えらい、昔の名前が出てきたなあ」と気付いてくださった方もおられるでしょうか。

この20年間は、宅配の仕事と二度の大病であっという間に過ぎました。下請けの下請けという弱い立場で、真っ当な労働環境などお構いなしの現場で、ひたすら働いては体を壊す、を繰り返しました。もう少し学習すれば良かったと、今は思います。

宅配に集まる仲間たちには色々な理由がありました。事業の失敗、人間関係、自分自身の弱さなど。高齢化と勤続疲労で、最近、仲間（70代と50代）の死が続きました。今、一番心配な仲間は心臓に爆弾を抱えて、3度目の入院中です。

聖書や哲学者の言葉をそらんじる彼は、歴史や政治情勢にうるさく、仕事の後、疲れ切った体で議論するのが私たちの息抜きでした。意見は正反対で、興奮すると声が大きくなる彼とお店で話すのは恥ずかしかったのですが。

そんな彼が、配達先のお客さんに誘われて「エホバの証人」の集会に参加し、すっかり穏やかになり、朝からまわりをげんやりさせていた「ぼやき」も一切聞こえなくなりました。

彼にとって、「エホバの証人」との出会いは救いだったようです。先日の会議で、「社会は教会を必要としているか」というフレーズを耳にした時、仲間たちを思い出してブルッときました。サービス業の末端で、倒れるまで働くしかない彼らと、私はこの先なにを分かち合えるか、問われているのは私であり、教会だと思っています。

これからどうぞよろしくお願いいたします。（ゆうじ）

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、
カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

●車でお越しの場合

阪神高速 13 号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

